

同志社大学脳科学研究科外部評価結果報告書

2015年 12月 1日

1. 研究科・専攻の評価

a) 研究科の教育研究及び運営体制

【所見】

本研究科は、日本で唯一の脳科学分野の5年一貫制大学院であり、また、神経科学に特化している点については、他にほとんど例がなく、非常に魅力的な教育研究内容であると言える。脳のしくみに関する研究はますます活発に進められているが、依然として謎が多く、今後作動原理が次々と発見され、また、その理解が、精神神経機能の病態の理解と治療法の開発に貢献することが期待されている。このような時代に、脳科学分野の優れた研究者による先端研究と次世代の研究者の養成を目的とする5年一貫制大学院をわが国で初めて開設し、目標に沿った研究と人材養成活動を高いレベルで推進しており、外部評価を経て発展をめざすことは評価に値する。また、授業料相当分の特別奨学金制度によって、大学院学生が研究に専念できる体制を整えていることについても高く評価できる。一方で、今後、どのような研究科としていくのかという将来構想を明確にすることが一つの課題である。

① 教育課程に相応しい教員組織を編成しているか。

大学院生に対する教員比率が高く、学生教育という点では評価できる。一方、特定任用研究員が5年という任期制であり、優秀な研究員を確保するには不十分であるため、長期の雇用制度を整えることが望ましい。

② 教員組織の編成に必要な基準を整備して適切な人事を行っているか。

基準は整備されており、決められた手続きに従い適切に人事を行っている。教員人事は非常に重要であるため、将来構想に従い、細心の注意を払って行っていく必要がある。

③ 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成・実施しているか。

授業科目は適切に開設され、教育課程は体系的に編成され、実施されている。

④ 人材養成目的の達成に向けて、研究科の特徴的な教育方法が機能しているか。

「研究安全と倫理」「脳科学研究戦略」が履修科目として実施されていることについては、本研究科の特徴といえる。また、「脳科学実験1・2（ラボ・ローテーション）」の科目や、脳科学研究科リトリート、QEが、各目的に沿って実施されており、評価できる。ただし、QEについては、期間が長すぎる印象を受けたため、より効率的な運営を検討することが望まれる。

⑤ 教育研究力を高める活動を展開するとともに、研究科の質的向上を図る組織的運営を行っているか。

FD委員会、自己点検・評価委員会が定期的開催されており、学生からのフィードバックについても、継続的に議論がなされており評価できる。

b) 定員充足の状況

【所見】

① 研究科の人材養成目的を果たすために、アドミッション・ポリシーに基づいた学生を獲得できているか。

入学定員10名に対し、入学者は2012年度5名、2013年度5名、2014年度3名、2015年度5名である。定員充足率が50%以下となっているため、今後の改善や努力を要する。一方で、入学時点で脳科学分野の博士の学位取得を目指して、5年一貫制の大学院へ入学する決意をすることは容易ではなく、全国的にも、博士課程後期の総数の減少と研究者離れの傾向があることから、定員充足の道のりが容易でないことは理解できる。また、志願者数は、2012年度8名、2013年度11名、2014年度4名、2015年度7名と推移しており、一定の基準に達している者のみを合格としている点については評価できる。

今後、修了後の出口を明確にし、本研究科の修了生が研究職や企業への就職等で実績を残すことが、本研究科の評価を高め、志望学生の増加につながる。また、留学生や社会人経験者等、多様な人材の確保に向けて、一層の努力を行っていただきたい。

c) 国際的な学術交流の状況

【所見】

① 国際的に高く評価される実力を備えた研究者、世界に通用する高度な技術と広い視野を身に付けた専門技術者を養成するために、国外の大学や研究科機関等と学術交流を展開しているか。

協定交流校一覧では、多くの研究機関と交流協定を締結し、体制づくりができていますが、研究科に限ると一部の研究者、部門に限られたものになっている。今後、より一層の国際交流の推進に努力していただきたい。

d) 研究活動における倫理審査及び環境対策の状況

【所見】

① 各部門で研究活動を進めるにあたり、研究内容に応じて、必要な手続きや申請をおこなっているか。または倫理審査を受けているか。

研究活動に対して、必要な研究倫理・環境保全関係の手続きを行っており、倫理審査、環境対策は適切であると評価できる。

e) 学内資金の投入及び外部資金の獲得状況

【所見】

① 研究科の経常経費として、どの程度の学内資金を要しているか

学内資金の投入に関して、本研究科は外部資金をもとに研究を行うという方針のもと、適切に運用されていると評価できる。学生への奨学金については、学生への経済的支援として重要な役割を果たしており、高く評価できる。

② 研究科設置時の目標どおり、経常的な研究経費を外部資金で賄うことができているか。

外部資金獲得のために、全ての教員が努力していることは評価できる。外部資金の獲得状況については、戦略的創造研究推進事業（CREST）、（さきがけ）、最先端・次世代研究開発支援プログラム等の研究代表者を務めるなど、国内有数の脳科学研究拠点としての存在感を示しているが、教員による差が大きい。

f) 情報の公表及び研究成果の発信状況

【所見】

① 研究科のホームページや各種広報媒体は、情報の非対称性を配慮した、志願者をはじめとする社会一般に伝わり易い構成であり、公表すべき教育や研究に係る基本情報が網羅できているか。

研究科のホームページについては、必要な情報は網羅されており、わかりやすい構成になっている点について評価できる。しかしながら、インパクトに欠けるきらいがあることから、動画や写真を用いてビジュアル的な工夫を行ったり、研究成果については、トップページでアピールを行う等の工夫が必要である。

研究科のパンフレットについては、情報量を抑えつつ伝えたいポイントが整理されており、良い出版物であると評価できる。

なお、本研究科は極めて独創的な教育・研究体制を取っており、研究内容や研究科の志をより幅広く国内外に発信するよう、今後とも努めるべきである。